《名誉会員講演》

ご　挨　拶

日本アイソトープ協会顧問
加　藤　貞　武

このたび，核医学会の名誉会員にご推薦いただき光栄の至りに存じます．

私は薬学の出でございますが，学会の創立当時から仲間に入れていただいたせいか，薬学会よりも親近感もつよく，このたびのことは一入うれしく思っております．

私は今年の5月5日で80歳を迎えました．

おかげさまで今日まで生きのびることができたわけでございます．80年といえば長い年月でございます．大学を出てからでも55年になります．その間，私は何をしたかと考えますと，これということもなく，まことにお恥かしい次第で，近年，人生のはかなく，淋しいものであることを考えて居たところでございました．そこへ学会からの名誉のご内示に接し，ほっと救われた思いをした次第でございます．

核医学会の総会のときに何か話すように言っていただいたので，すぎこし方をふりかえって見ました．私のごときつまらぬ人間にも，いくつかの思い出があり，それあったがために私が今日，この光栄に浴することができたのだと思いますので，時間のゆるす範囲で述べさせていただきます．

私はごく平凡な生れつきなのでいつもどなたかの指導をうけ，はげまされて今日まで参りました．

小学校の校長を永くつとめた父からは Gentlemanship を，武士の娘で男まさりの母からは根性を，芸術家であった兄からは美しい心の世界を教えられました．

素質にめぐまれていた姉は，私を一番可愛がってくれていたのですが，1919年（大正8年）に20歳の若さで腸チフスで亡くなりました．

その時私は12歳の小学生で病人の枕元に坐って居たのですが，彼女は私に「しっかり勉強して偉い人になりなさいね」とくり返し語りかけてくれました．

私はあとにも先にもあのように強く感動したことはありませんでした．このときのことが今日まで支配しつづけていると思われる程であります．

家族の応援で何とか，東大薬学科の薬品製造学教室に進み，故慶松勝左衛門先生のご指導をうけることになり，卒業後は，昭和7年の不景気の最中にもかかわらず，恩師のおかげで大阪の東洋製薬貿易 K.K. に入社．故東代清次郎社長の下で働くことになりました．東代社長は当時大阪道修町で立志伝中の人として評判の高い人で，立派な識見をもった実業家でした．

大学を出たばかりの私は幸にも慶松先生と東代社長とお二人の指導と訓とうを受け鍛えられることになったのです．それは私にとって大変な幸でありました．

9年後の昭和16年に京大に新たに設置された薬学科の助教授に押して下さったのが慶松先生であり，激励して下さったのが東代社長であったのです．高木誠司薬学科主任教授，石黒武雄担任教授もよく面倒を見て下さいました．

京大での私の研究は，そのまま戦時研究として抗マラリヤ剤の製造に役立ちました．

終戦後，大学の研究活動が鎮静したので，私は昭和22年辞任して大日本製薬 K.K. に移り，研究開発の責任者となりました．

大日本製薬の故滝野　勇博士（当時社長）は私にやりたい事をやらせて下さった恩人です．

新しい時代の薬の研究体制をつくり，抗ビールス剤の研究に没頭したことがありました．こ

Presented by Medical*Online

のときは慶応薬化学研究所上田武雄名誉教授，同；故豊島　滋博士（当時講師），故阿部勝馬先生，故内山圭吾先生（当時駒込病院長），その他の方々のご努力のおかげで日本脳炎特効薬PANSができたときの感激は言葉では言いつくせません．

私はPANSの研究報告をカバンに，新しいテーマを求めて欧米各地を旅行しました．

そこでめぐり合ったのが放射性医薬品であり，それからのことは核医学20年記念号（1984年8月）—放射性医薬品と共に—に書かせていただいた通りなので省略することをお許し下さい．ただこのとき，紙面の都合で割愛した事柄について一言述べさせていただきたいと存じます．

1) 外国人との関係

a) 大日本製薬ではじめた放射性医薬品の仕事を米国アボット社との合弁会社に切りかえてダイナボットRI研究所を創立し，この会社の運営をまかされました．Joint Ventureなので Abbott 社の幹部 Dr. E. Volwiler（当時会長），Dr. A. Weston（当時研究所長），Dr. E. Matson（ダイナボット副社長）等がよく協力してくれました．Dr. Matson は Joint Venture の Partner として実によくやってくれました．日本の核医学がうまく発展したのも，彼の協力のおかげと言っても言いすぎることはないと思います．ほんとうに彼は得難い人物でありました．

b) 米国の核医学関係者が，私を，また日本を援助して下さったことも大変なものでありました．

Dr. J. Sternberg, Dr. G. Taplin, Dr. H. Wagner, Dr. W. Beierwaltes, Dr. W. Blahd, Dr. N. Tauxe, Dr, J. R. Maxfield, Dr. J. Kuranz, Dr. M. Tubis, Dr. S. Berson, Dr. R. Yalow, Dr. W. Eckelman, Dr. H. O'Brien

等々数えきれません．

この機会にこれらの方々の日本に対する友情に心からの感謝を捧げたいと思います．

彼らの好意が非常なものであったことを皆様に知っていただくことは私の責任でもあると思う次第であります．

2) 放射薬化学講座が，故掛見喜一郎博士，上尾庄次郎元教授，その他のお骨折により京大に，また故塚元久雄教授，その他のご努力で九大に設置され，今日の隆盛を見つつあることも忘れられません．

いろいろとくどくど申し上げました通り，私は自分自身は平凡な男ですが，常に内外のすぐれた方々のご指導，ご激励を受けて勉強をつづけてくることができた幸な人間であると感謝しております．

最後に皆様にご報告して一緒に喜んでいただきたいことがございます．もうすでにご存知の方もおありのことと思いますが，1986年6月22日に米国核医学会の Business meeting で RPSC (Radiopharmaceutical Science Council) から表彰をうけたことです．

今年の SNM の2月号に News line として1頁大で報告されて，はじめて私には過ぎたことと心の引きしまる思いをいたしました．

私はこの表彰は全く皆様に与えられたもので，皆様の代りに私がお受けしたものであると考えております．

今日も私は，この台の上に立つ光栄を与えられましたが，これも皆様のおかげであること，それに対してお礼の言葉もないことを申し上げて感謝のご挨拶といたします．

Presented by Medical*Online